

まで勤務しました。

父の死亡後は実業の農業を継ぎ、いろいろの役職を勤め、お陰様で七十八歳の現在も元氣です。土地改良区、農業年金友の会長、農業者年金協議会長、恩欠連の支部長、恩欠県連の組織委員長等をやらせていただきながら、子供二人孫四人に恵まれ、毎日を感謝と合掌で幸せいっぱい暮らしております。

要するに私の苦勞の最たる者は、マラリアであり、その後遺症の期間を含めると十年の長い年月を苦しめられました。

歩兵と航空兵の兵役六年間

愛媛県 和田 佐太郎

私は、大正八年二月二十五日、愛媛県温泉郡川内町南方二六〇三で農家の長男として生まれました。昭和十四年徴集で、十四年十二月に台湾歩兵第一連隊補充隊第四中隊（台北市）入営です。

入営当時の私の家族は次のとおりでした。

父 健在 農業 水田七反、果樹園三反、畑一

反、山林一町三反。

母 “ “

弟二人 “ 学校及家事手伝い

妹四人 “ “

私が兵役に服するため家を出ることは、多少マイナスマ面もありましたが、時局柄泣き言を言える世相ではなく、父母に励まされて勇躍郷里を出ました。時に昭和十四年十一月三十日。

小学校で四人の入営者が、村長、在郷軍人会長、その他の幹部から激励、祝福を受けて覚悟を新たにし、私が代表として挨拶を述べ、それぞれの目的地へと出発したことを懐かしく思い起こします。四人出征して一人戦死、二人は戦病死（三人とも南方方面とか）、生還者は私一人で、復員当時はめでたいのか、悪運が強いのか、変な挨拶をされて若干肩身の狭い気分でした。

当時の川上村を出て隣村の横河原より電車で高浜へ、

船で福岡市へ、博多より台北へ、と二昼夜の行程でした。

いよいよ軍隊へ入隊です。元来、私は愛媛県人ですから松山か四国の他の部隊かとの予想に反して、台湾へ、しかも愛媛県人は私ただ一人です。心細さでいっぱいでした。思えば貧乏くじを引いたもの。

松山は江戸時代は、徳川の親藩、松平（久松）家でした。台湾歩兵第一連隊には薩摩とか肥後とか九州人が多い。同じ愛媛県でも宇和島の伊達、高知の山内家は皆勤皇派だが、私は松山の親藩で佐幕派（賊軍）ということです。

はるか昔の幕末、明治維新当時の勤皇、佐幕の対立を根に持って「伊予の人間の通った跡は草も生えぬ」と、そんな極端なことまで言われ、こんな無茶苦茶なことでもこつ酷い目に遭い、殴られ続けました。失敗や不都合もないと思うのに制裁を受けました。つらい、苦しい、情けないの毎日でした。

郷里を出るときの村長さん以下皆さんの激励の言葉を思い起こして頑張りました。

軍隊の消灯ラッパは

新兵さんは かわいやな一

また寝て泣くのかよー（節をつける）

歌の文句が事実を何よりも雄弁に証明しています。

次のようなこともありました。

内務班で新兵は全員横一列にならび、順次ビンタを張られます。私の隣に土佐の高知出身者がおりました。土佐人は殴らず、と私を殴ります。ひどい差別です。日曜日は外出もなく、朝から古兵の肌着、禪まで洗濯します。やれやれと思う間もなく集合です。宮庭に台湾松があります。その木に地上二メートルくらいの高さまで上って、ミーン、ミーンと声をあげて蟬のなく真似をさせられます。私は声がちょっと甲高いので、「和田！もっと鳴け」と長々とやらされました。それを古兵たちは煙草を吸いながら笑って見物していました。

この嫌なつらい古兵の制裁は台湾から南支へ移ってからも、上等兵になってからも続きました。昔の軍隊の初年兵の一期の検閲までのひどい苦労は、現在の若

者には到底辛抱叶わぬこと。私のみでなく、軍隊生活をした者は皆同じ思いでしょう。「玉磨かざれば光なし」。

教育訓練演習についても思い出は尽きません。広い土地に草いっぱい、練兵場での夜間演習のとき、初年兵の一人が葉莖を一個落としました。全員横一列になって長い時間捜したが発見できず、その兵は帰隊後、歯が折られ、面相が変わるほど殴られました。

また規則を破り、便所内で喫煙しているのを、週番上等兵に見つかり、隊内に「火災呼集」がかけられてバケツで水を浴びせられ、その上、口いっぱい二〇本くらいの煙草をくわえさせられ全部に火をつけ、煙草の火で上下の唇を火傷して、泣いて謝ったこともあり、大変厳しかった。

どうにか一期の検閲も済み、昭和十五年三月基隆港発、海南島の海口港上陸。海南島攻略、警備に参加。次いで雷州半島へ移る。米国よりの援蔣物資輸送路遮断作戦でした。この時期は制海、制空とも日本軍圧倒的優位で、勝戦の連続、食糧も慰問袋も十分に案な時

でした。作戦は順調に進み、援蔣ルートの木橋（深い谷にかかっていた）をすべて爆破し、欽寧（欽県）を撤収しました。この期間、私は十一年式の軽機関銃を持つ四番になり、十一年式の重さに苦しみました。この作戦行動中、班長の米満軍曹が不幸にもマラリアに侵されて、連日四〇度の高熱に苦しみました。私は数日間昼も夜も付き添って看病し、何とか元気になるまで不眠不休の努力をしました。

以後、班長は深く感謝してくれて、何でもかんでも「和田！和田！」と声をかけてくれ大事にしてくれました。一選抜もその所為かも。ところが禍福はあざなえる縄のごとしとか。私の荣誉ある一選別入りもまた災いのもと。隊内に私より先任の上等兵一人、昭和十二年兵の一等兵（宮倉入りの経歴ある古参兵）が一人、二人揃って私には意地悪、この上ない私的制裁です。隊内では階級もさることながら、最後の決め手はメンコの数です。私より二年も古参の性悪一等兵、同じ上等兵でも先任古参の上等兵、どちらにも頭が上がりません。週番上等兵勤務中もあれこれと私用の強制、果て

は殴る蹴るの暴行。作戦行軍中に豚の片足の重いやつを背中に乗せられ、その重さと南支の暑さにはもう苦しくて、落伍寸前の苦しみも数多く、つくづくと軍隊がイヤになり呪わしく思ったものでした。

それを救ってくれたのは、南方特有のスコールでした。雨に打たれると萎れた植物が蘇生するように、私の身も息を吹き返し元氣を取り戻しました。また古参の一等兵は炎天下の行軍中自分の三八式小銃を私の肩へ乗せて、自分は手ぶらです。私は十一年式軽機を担いでふうふうと汗を流しているのに、自分の小銃を手から離す歩兵が信じられますか。とにかくひどいものでした。この期間の私の部隊は第四十八師団でした。

以上のような状況で私もホトホト軍隊がイヤになり、将来を考えヤケになり、自殺でもと考えました。この苦況を救ってくれたのは米満班長です。私の様子にどうも合点がいかぬので一夜私を呼び、じっくりと心境を聞いてくれました。じゅんじゅんと私の心の弱さを説き、「頑張るのだ！ 攻撃は最大の防衛であることを忘れず軍人精神を充実せい！」と指導してくれました。

この温かい班長のお陰で私は助かり、その後元氣いっぱい精進し、班長のご恩に報いんと決心したことでした。恩人の教訓！「断じて行えば鬼神もこれを避く」。

チャンスがきました。一般航空兵の募集です。台湾の歩兵に愛想を尽かした私は勇んで応募したら合格。

昭和十六年三月二十日、第八航空教育隊へ派遣を命ぜられ、心中の喜びいっばいに滋賀県八日市の教育隊へ赴任しました。第三中隊に配属されました。歩兵から航空兵にと大転換をし、心機一転新しい業務に励みました。夢のよう、大嫌いな歩兵よ、さようなら。正に地獄より極楽です。八月兵長に進みました。

九月、陸軍航空技術学校に入学（東京の立川市）。第一期生です。そこで私も軍人として生きようと決心して現役を志願し、伍長に任官しました。

航空技術学校は重爆撃機隊の機関整備です。空中での飛行機の機関整備が任務です。

重爆機の乗員は六、七名。

操縦（正）一名 操縦（副）一名

機関 一名

通信 一名(射手をかねる)

側方射手 一名(胴体の中央部で横、上下を射撃)

尾部射手 一名

計 六名、時に七名となります。

学校の教育期間中、私が最も困った点は、私は小学校卒業で最も低い学歴即ち最低の学力しかないので、何しろ農家の跡取り息子として成長し、勉強は不要でした。第一期生一五三人中、小学校卒は数名にすぎず、ほとんどは中学以上の学歴。肩をならべていくには本当にむずかしかった。

教育の内容は、

内務 先ずよし

術科 特に器用で案にこなす

学科 学力低く 難解なこと多し

そこで他人の倍の努力をと消灯後、便所の暗い電灯の下で本を読んだものです。教官に見つけられて「おれの部屋へ来て読め」との親切に甘えて教官室に入り、明るい電灯の下でだれに遠慮もなく勉強ができ、またよく教官にも教えていただきました。この親切な人は

小泉中尉さんでした。こうして学力のない私も懸命の努力をして卒業成績は一五三人中、人に恥ずかしくない上成績でした。時に昭和十七年三月三十一日でした。学校を卒業しての任地は南方軍隷下部隊(即ち「比島中支那飛行第六十二戦隊」=重爆隊 三個中隊、一個中隊九機。戦隊全部で九×三で二十七機)となる。

四月五日、宇品を出港してより高雄、比島リンガエン、仏印西貢(サイゴン)、昭南島(シンガポール)、ラングーン着。第六十二戦隊への追及行でした。ビルマのラングーンへは五月十九日です。ところがどうしたとか五月二十四日ラングーン発、昭南島、西貢、ハイフォン、広東、上海を経て七月十七日南京着。

間もなく一個中隊三機編隊で重慶爆撃に出ましたが、何故か三機ともに未帰還機となり悲劇でした。戦隊長の落胆憔悴ぶりは大変なもので、われわれも何ともやる瀬ないことでした。

この間昭和十七年十二月一日、陸軍軍曹。

そのうちに戦隊は部隊ごと内地勤務となり、北海道の帯広へ移りました。約一週間くらいして、ここは雪

が深いので浜松へ訓練のために転地、移動しました。

浜松で負傷しました。それは機体を移動中、後輪のタイヤに左脚を巻き込まれて、脛骨を骨折でした。浜松の陸軍病院へ入院（約半年間くらい）しました。

退院後は空中勤務をやめて、事務屋になりました。

私は学歴も低く、今まで事務屋の経験も皆無なので「不可能です」と言うと、「自分の氏名を書いて見よ」とのこと。書いた文字を見て「これならできる。ポツポツ習うより慣れろ」といわれ事務屋に転進しました。戦隊付きです。

左脚の骨折部の病状再発のため、旭川陸軍病院へ再入院しました。この入院中に戦隊は南方へ出動、退院した私は盛岡の第六十二戦隊留守部隊へ転属しました。盛岡では幹候隊の助教となり、教官不在時は代理を勤め、浅い経験と知識しかない身でしたので大変な苦勞をさせられました。

事務屋としては、命令受領、兵器受領、遺骨受領、分任官業務その他雑多な業務に多忙を極め、出張ばかりで、終戦までに足を入れてない県は徳島、高知の二

県のみという状況でした。樺太まで行きました。忙しい毎日ですが、低学歴のため、常に不安、苦勞、ヒケ目を感じ通してした。

歩兵時代は私的制裁で死のうかと思うくらい苦勞で、航空兵時代は学歴の低い無知無学とヒケ目で苦勞。私の軍隊生活は終始苦勞との切れ目のない年月でした。

遺骨の件では、外地の戦隊よりの遺骨には、遺骨はなく遺品（爪や髪の種類）もないことが多く、命令により鹿児島県の海岸の砂を靴下に詰めては留守家族へ送ったこともありました。

分任官の仕事の一つに軍人の給料の支払があります。上からもらう金は大きい額の紙幣ばかりですから、部隊の近くの郵便局で金種別の表を持って行き、細かくしてもらい、それぞれの封筒へ入れるのですが、親切な女の子（梅子さんといった）がよく尽くしてくれて大助かりをしました。その後も文通を続けていますが、彼女は学校の先生と結婚して、やがて夫となった人は校長先生までやり、今は定年となって悠々自適の身とか。相手の加齢老化を見ては、自分の年寄りぶりを悟

るとのことです。

東京市（当時はまだ市でした）内へ出張中の出来事。昼日中、米軍の空襲があり、列車も不通のため、大勢の人がレール沿いに歩いていました。そこへキーンと鋭い爆音とともに、ダッダッと機銃射撃を低空より受け、人々はクモの子を散らすように分散逃避します。ふと見ると若い女性が乳飲み子と風呂敷包みを抱えて逃げまどっています。ちょうど駅の構内で線路の枕木が一山高く積んでありましたので、よしと私もその死角へ身をひそめ、その母子を誘導退避しました。敵の機銃弾は枕木にパシッパシッと雨のように集中投下され、陰で見ている私たちもそのすさまじさに胆を奪われ、茫然とするばかり。やっと機影の遠ざかる合間を見て一目散に目標の方向へ走りに走りました。あの母子も既に五十年余り経た今ごろ、どこでどうして生きておられるか。幸せを祈るばかりです。

昭和二十年三月一日、任陸軍曹長（最終階級）

最後に終戦前の五月、栃木県真岡秘匿飛行場設定作

業のため、茨城県新治へ派遣されました。昼は空襲があるのですが、作業は夜間である。六月半ばに任務終了して帰隊しました。やがて第七飛行場大隊に転属し、終戦は八王子付近であったと思います。

人事係准尉が、山と積まれた書類や軍隊手帳をすべて焼けと命ずる。私は責任者となって相当の時間をかけて焼却しましたが、これで日本陸軍の最後かと思うと万感胸に迫るものがありました。しかし、私自身の最後の物として軍刀と軍隊手帳は焼かないで保管しました。それがこの軍隊手帳です。軍刀は故郷愛媛のミカン山で焼きましたが、錆びて今はどこに埋めたか……。

昭和二十年十月三日、復員帰宅しました。列車の中はもう現在より考えると、これ以上はないと思うほどの混雑と無秩序が見聞され、果たしてこれからの日本はどんなことに相なるのかと、心配でなりませんでした。また沿線に見られる焼け野原と化した国土の悲惨さ！正に国敗れて山河あり。歴史は繰り返すというから、またいつかこの焦土も立派に復興するかどうか！いや必ず前以上に立派なことにはしなければと思いつつ

満員列車にゆられていました。半世紀も以前のことです。

懐かしのわが家へ帰り着くと、家族全員元気で迎えてくれて大安心でした。父の宮々と築いてくれた農業の財産を私はしっかりと受け継ぎ守って、一筋に励み貫き現在に至りました。

現在の私の家族は妻と一男二女。孫は全部で四人。

皆元気で自分自分の道を進み、分を辨えて家庭円満、不都合はせず、金銭の苦勞もなく、平凡で幸福な状態に恵まれ、感謝の毎日です。

支那事変

野戦重砲兵の初陣

神奈川県 片岡 幸雄

私の父は警視庁勤務、母は学校教員という家庭の次男として生まれ、横須賀中学校卒業後、日産自動車に勤務していました。

昭和十一年一月、現役兵として三島野戦重砲連隊第六中隊に入隊しました。当時、特科連隊では現役二年の服役でした。初年兵服務期間で特に思い出すことは馬でした。都会に育った私は馬に触れたこともありませんでした。馬の脚を持ち上げて蹄の裏の溝の中の汚物を奇麗に洗って蹄油を塗布してやらねばなりません。それが朝と夕の二回、毎日の日課です。怖さで息が止まりそうでした。また厩舎の寝葉は朝、舎外に運び出して乾燥させて、夕方また運び入れて、馬の寢床を作る作業の繰り返しです。

一期の検閲直後、幹部候補生の採用試験を受けましたが、検査場に入るドアの開け方が悪かっただけで失格し採用されず、一般兵として現役を勤務しました。

現役服務中、支那事変が勃発し、動員令が下り、補充隊勤務として引き続き服役し、昭和十二年十二月上等兵に進級し初年兵教育をやりました。

昭和十四年三月に宇品港を出航し、上海に上陸後南京を経由し漢口に到着、野戦重砲第十一連隊第二中隊に編入されました。